



Eld; KouWUKAI

〒545 1-1307, 1-6, ASAHI MACHI
ABENO, OSAKA, JAPAN 10

12, Dec '85 N-TO 299

竹山通鑑

大阪市阿倍野区旭町1-6, 1-1307

卷之三

卷之三

原稿(一九二四年三月)

「糸彈の思想」を、「いかに革命的かを問う思想」
の或は、いかに根本的か、本質的か、原理的か」といっ
た、ちよつと手軽に扱えない言葉でもよい」と、よみが
えて、考えてみると、その「特性」とても云うべき質が、
よりはつきりとみえてくる。

第一に、いかに革命的かを問う以上、その「革命的」あるいは「根本的」というのは「どんなことか」が英語で明瞭にならなければならぬ。

三からまず、その論議からはじる苦か必ずそれが「省略」したところから、私彈ははじめられる。(そしてそれを「何が革命的か」など反向すると、私彈のやりがそし一つなり対立一分裂を引きあこし、弾頭は成立し

カニに、「私弾しの中で、「それは、どんなことやら」が向
いかえされないのは「そぐへな」と云ふんでも判つてゐる
とする、向う者専われる者に共通の「立場」と「認識」があ
るからに違いない。と云うより「もう、よく判つたこ
とやう」とする、いわば「暗黙」の前提を押しつけられ
何となくさつとさせりでいる一(例えば「差別」とか「友権
力」とか)云ふると、黄門さんの「藝の教所」みたいよ
もんで、ぼくらみんなはこれには弱い)——一方の「立場」か
ある。

「私彈」で、まあ目立つのは、「徹底的に向う姿勢」である。なぜならそもそも向うことが、へ暗黙の前提

先号廿一「京都反彈を集合して、基調報告者さん」とかいにが、あれは基調でなく、主に日本に關しての「報告」だーとこう教示をうけた。(成程東京の皆さんが、京都で基調報告する「舌がない」とほくのヤジが、M氏に解れて語されてると、出たとか。(その点、無責任だが、結構なもの)で、ぼくが何ゆうとみなされたとか。以上事実の關係について訂正。

さて、イタムを発送したあと一週間ほどは東信がすこし多くなり、いつも樂しみだ。といつても、内容に立入った感想はよくて一通位。たいへんはない。まあ、ナンツップテ。だが、「ものとそくんなもんや。自らも他に対してもうやないか。ふくでもうえるつだけ」でもありかたいしと、20年來、なん分承知している。ところが前々号につりては、便箋数枚つかが五通！ 前号については四通（短文9ヶサメ？）（五通）といやべつ（一通）を入やると、十通（も）！ で、これは手抜きして書きとばす（つ）ものような安易なつくり方。されば「なんや」と思ひ立つて、ちよつと書じてはふう子さんにみせる。と、固苦しい。あもしろない。ここのワカラシ。したがいに書き直して8日までに発送（つもりが今日10日になつても）のうえ、開封（や）ふをは上部につけ。それとまことにうその半分抜しかがいでないと、今日で終らぬこと確実。

「葵の印籠」をかざして——この理非を照し出す本質的、革命的行為とされるに止りでない。その「徹底さ」こそを、いよいよ革命的、本質的とすることである。

や四に、その時桌から「糢弾」は、毎日糢す行為そのものを「意味」とする「糢弾の思想」に転生する。

そして、いままで多少とも存在していた「読合」の部分
ちがいをちがいとして認めあう——相互ア解をつくる——と
云った空気はまるづまりけし態んでしまう。(しかし、立
て前としての「話し合いや相互批判はよいことだ」という、名目
だけのレッテルは、わざとはがされたまま、一応は貼ら
れている。そして「（私彈中の）公正さ」の説明として時々顔を出す)
（もともと「私彈」（が出てくるのは））戦争の深まる段階で必要な、「内
部手エリク」の役割として必要かどうかからだ。がそ
の立て前こすら「私彈の思想」とはみ出せない。されば、「チエツ
ク」だけを取り出して、いよいよさびしくいよいよ肥大
させ、独自の思想と行動の領域を、運動のなかにつくり
出していることにある)

次に、向う者は、そのとき決して向う責任を負はれない。そして向われるものは、自己批判と反省・競争のみを求められる。

と云うことは、立場を運動して、向われる者が向う立場に立つだけのことで、いつでも容易に、自分を正当化することができる。

つまりそれは「固うこと」で、既に正義となる自分の立場を、証明すればよい」という、裏屈でこの上なく有効な「平口」の示唆である。(上巻の^{二二二}「反論」に該当する)「もちろん、運動はその発足から、利害功利を求めない

善意と信頼、いわば自己犠牲をもよお
こびとする人同關係で成り立つてい
る。だからそのような「示唆」は、
運動者たちに拒否され、意識下に
沈んで、消える。

るところにひろがり、潜在的に日常一般化していへるのは、多分に、この「無意識下に沈んでしまつたもの」にかかるわつている。

次に、一つのことを「ぼくは強調したいのだが」へ、乱弾の思想へは、だから眼にみえた表面の、直接的乱弾行為（それだけなら、微もしてゐるし、運動に及ぶ影響も、まだ知れてる）にとどまらない。

それは、へかそつて、どうか、だからもしろというか、運動のやうめて日常的で普通の風景・出来事のなかで、眼には見えずとうそにくいで「何か」として、さまでまにどんなところにも潜んでいる、一という問題である。へきだがうこく「思想」はありだか……

へたとえば、何かにつりて問題提起がある。その提起が口調として、或は論のすゝめ方として乱弾的であることで、提起がきびしく、カリコ^{カリコ}が通つていて、見えてる。誰もが興議や反対を出しにくい雰囲気がつくられ、容易にみんなを説服できる。

だからそれへり、もし「負面」となると、質問者もまたへ乱弾調へとなるが、それが対立・感情的不和へといかなくて、結着のない議論の不毛なやりとりとなる。同席者はまことにこれで二分されるか、またはしぶしぶやりきれなさで、その後運動への当初の情熱を次々に失ってしまう。

さらに古づまうば、「とくにリーダーシップをとる人たちはしばしばやる」アピール「演説」「論説」のはしばしにも、その「乱弾調」は、無意識のうちにとり込まれていて、目に見えない「何か」の侵蝕が、運動の体質をも規定しながら、戦争を左右する。しかも「見えぬいゆえに」決して問題とならない。

▼もちろん、運動の中で折に触れて出てくる、中傷、批難：告発・弾劾・摘発の多くも、この「何か」に、多少にかかわらず動かされている。そして、がなうずと決めた的な局面では「乱弾」へと展開していく。しかし向題が、「なんことだけに」と「まらない」のは、たとえば（運動の内部へはいればほいるだけ）運動の半面ともうに「しんごく」「おもしろなさ」に加えて、「自分が何かのことじで目立つて、誰かに云々されたりしにら……」とか、「ふとしだけ思いつきを提起して、深刻に反対されたり……」というよろやか（それほど具体的ではなく、ちやんとした気分）のやりきられなさが、彼自身の主体的意志を抑制し、行動を萎縮させる。つまり、定化と硬直性を免れず、すぐなくとも状況を運転する變化や、多様性を生み出すハブニングは、圧殺される。

リキれなく重くるしい効果氣」「展望の困難」の瀟洒一般には、運動への献身を見失なわせるばかりでなく、そのような状況で、遂に運動を支配するものは、「乱弾の思想」の衣の下にかくれて操つていた——それこそまだれもない本物の「検事の思想」と呼ばねばならない。

当然、脱落者を生み出でざるをえない。

結果としての小数化、それに一そく拍車をかけるのは更にきびしい乱弾が産み出さず、内ゲバや分裂である。

そのような状況で、遂に運動を支配するものは、「乱弾の思想」の衣の下にかくれて操つていた——それこそまだれもない本物の「検事の思想」と呼ばねばならない。

▼さて、論旨を判りやすくすこめるため、やゝ舊例では極端化します。



乱弾团体と誤解されかねないが、ぼくの古いにかつたことは（多くの運動体では、めつたに「糾弾」は行われてしない）（そこまでいって大てい分裂が、一方の脱落、時には自然消滅的解散になる）——つまり「乱弾」までに至らず、大ていはへ幸いにも最後まで息がついたかず、立ち消え的に（しかしもやもやしてくすぼりながら、時間が処理してしまう。そして「行動」の中で、うやつと解消して「連帶感」をとりもどす——というくりかえし、の：——その没落の中での「起死回生的」なこと（例えば、新人たちが先頭に立った活動一が出てくれば、別にして）——運動のシリணと衰退が止んでしまむ。その「運動病」とも云ふべきものの「病原菌」は？——ということである。

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

×

6

▼ ふうまでもないことを、運動にはじめから「運動のたまに自己批判・組織の真横・内容の客観的分析」徹底したへ總括」として、更の部分に集束をあてて、きつたりしみくる「作業」が、当然されねばならぬ。しかし、仕事終ったあとそのそれは、いややかしくて、ついなおさらになりやすい。だからその必要を強調して、一部の人たちがもっぱらその任に当りながら、みんなにへ總括を提起する——ことが出来る。（その總括は、運動体と提言者の質によって、がわくさまよひ、ピンからキリ、今まで、その克服のために運動全般の動向を、歴史的状況的に総括し、各陣営の總括内容にも示唆を予えるものとしての運動論家との總括的發言が重視されねばならぬのも当然である。それが總括ある、まだ元ども、討論家の「まじめ」の立場を守らなければ、その意見のために運動全般の動向を、歴史的状況的に総括し、各陣営の總括内容にも示唆を予えるものとしての運動論家との總括的發言が重視されねばならぬのも当然である。）